学部
大学
か
治営
明経

国語問題

はじめに、これを読みなさい。

1 この問題用紙は13ページある。ただし、白紙はページ数に含まない。
2 試験時間は60分である。
3 解答用紙に印刷されている受験番号が正しいかどうか、受験票と照合して確認すること。
4 監督者の指示にしたがい、解答用紙の氏名欄に氏名を記入すること。
5 解答は、すべて解答用紙の所定欄にマークするか、または記入すること。所定欄以外のところには何も記入しないこと。解答欄は裏面にもある。
6 問題が指示する数より多くマークしないこと。
7 解答は、必ず鉛筆またはシャープペンシル(いずれもＨＢ・黒)で記入すること。
8 訂正する場合は、消しゴムできれいに消し、消しくずを残さないこと。
9 解答用紙は、絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。
10 **解答用紙はすべて回収する。**持ち帰らず、必ず提出すること。
11 この問題冊子は、必ず持ち帰ること。
12 解答をマークするときには、記入例を参照すること。

良い例	悪い例
●	◉ ⊗ ◎

(マーク記入例)

(一)　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

メディアというテクノロジーの文字が人間の精神を書くようになると、人間の意識生活の成立条件が大幅に書き換えられることになりました。

なにしろ私たちは、日頃テレビをみたり、電話をしたり、ネットを見たり、映画を鑑賞したりして、日常の意識生活を営んでいるわけですから。

ところで、そんなメディアを通した日常の意識生活において、よく考えてみると私たちは不思議なことをしていると思いませんか。例えば、写真を考えてみましょう。私たちは、楽しい旅行の思い出にしても、美味しい料理にしても、記念すべきパーティにしても、パチリと写真をとって、その写真を見ながら、ああこの時は楽しかったね、懐かしいね、きれいな景色だったね、と思い出しているわけです。写真によって思い出という意識をつくり出している。

しかし、①よく考えてみるとこれはちょっと変なことなんです。シャッターを押せば写真は一瞬で撮ることができる。一瞬というのは、文字通りまさに一回瞬きをするくらいの時間ということですが、実際の瞬き一回にかかる時間とは、七分の一秒から一〇分の一秒くらいです。それに対して、カメラのシャッター速度は、三五ミリレンズで、五〇分の一秒が手ぶれしない限界と言われています。つまり、カメラが画像を撮るために切り取っている時間というのは、人間の「一瞬」よりもさらに短い[注1]セグメントということになります。そんなに短い時間を、私たちは認識することができない。だから、写真をとってみると目をつぶってしまっていたりすることが起こるわけです。私たちは、撮影のときに、一生懸命ファインダーを覗いたり液晶画面を覗いたりしているけれど、カメラが「写真を撮る瞬間」を私たちは捉えることができないわけですね。

写真は、あなたが見ることができない瞬間を撮っている。私たちは、写真を撮られた瞬間を捉えることができない。写真機は私たちが瞬きするよりも先にシャッターを切るので、いくら目をコ[a]らしてみてもその瞬間をつかまえることはできない。そのぐらいわずかな時間の幅で撮られるわけです。私たちは折に触れて写真を撮り、友達同士で見せ合って思い出話をしたりするけれども、

実際にはその瞬間を見ていない。

私はいつも講義などで、学生たちに、メディアのことを理解するには、そのメディアの気持ちにならなければいけないと言っています。おそらく写真機は、こう思っているんじゃないでしょうか。きみは写真を見て「あの時は楽しかったな」なんて言っているけれども、実際にはその瞬間を見ていなかったじゃないか、と。

映画にしても、実際には一秒につき二四コマの静止画像が映し出されているのですが、私たちには一コマ一コマは見えません。そうであるがゆえに、私たちに動いて見える。テレビにしても方式によりますがやはり一秒に三〇フレームの画像が半分ずつ作られては消えるのを繰り返している。それが見えないからテレビ画面では動きが見える。つまり、人間と機械の能力の間にギャップがあって、実際には静止画像がコマ送りされているんだけど、それを一コマ一コマ知覚することができないから、②動きを見る意識(運動視)と時間意識が生み出される。つまり静止画像が視えないから、動画が見える。

あるいは音声にしても、フォノグラフ[注2]は、何かを聴く意識の成立に先立って音波のみを記録します。音波のみを書くフォノグラフによって、私の聴く意識が構成されることになるわけです。音を聞くという聴取の意識は、すぐれて現在時の経験ですから、フォノグラフの再生を聴く意識は、対象(音源)を現在時にソテイ[b]し、音の変移にしたがって時間の流れとともに構成されるようになる(これはフッサール[注3]の現象学が深く考えようとした問題です)。

人間の認知よりも下、あるいは手前のレヴェルで［　I　］が痕跡を書くようになった。私たちは写真を見て思い出話に打ち興じているけれども、実際にはその瞬間を見ていない。私たちが映画を見て動いて見えるのは、静止画像を一コマずつ見ることができないからである。レコードで死んだ人の声が甦るのは、人間には見えないスペクトル(音声波形)をフォノグラフの技術が書いているからだ。

見えないから見える。不在の存在が聞こえる。

私たち現代人のメディア生活の多くの部分は、そういったパラドクシカルな現象に支えられています。かといってこれは別に錯覚や幻覚ではなく、物理学的・生理学的な法則に基づき、人間の認知の能力と機械の働きの間にあるギャップを利用して成立して

いる、メディアの働きであるわけです。例えば、映画ですと、人間における運動視という意識の活動を書き取る文字（テクノロジーの文字）が発明された、ということなのです。フォノグラフは、聴く意識を書き取るテクノロジーの文字の発明だった。

このような機械のテクノロジーの文字と人間の認知とのギャップによって、現代人のコミュニケーションは成り立っています。このギャップのことを私は、「 Ⅱ 」と名付けています。

メディアは、思い出だとか、遠くの光景の知覚だとか、運動視だとか、音声による遠くの人との心の通い合いとかといった、「意識」を作り出します。つまり、メディアは意識を生み出す（＝生産する）わけですが、その「意識生産」は、人間の知覚よりも下で人間の認知に働きかける「技術的無意識」に支えられている。メディアの「技術的無意識」を基盤として、現代人の「意識」は成立しているわけなのです。

こう考えてみると、ちょっと居心地が悪いですよね。「思い出」の写真なのに、その瞬間を本当は見ていなかったのですから。静止画だったのに運動に視えていたのですから。そういうことに気が付くと、意識生活の Ⅲ 性が揺らいできます。ちょっと不気味な気持ちになるでしょう。コミュニケーション文明というのは実のところ、人間が思っているよりも、居心地の悪いものなのかもしれません。私たちはメディアの技術的無意識に支えられ、コミュニケーション文明の中で「意識の生活」を営んでいる。このことを深く考えていかなければならないと思うのです。

技術的無意識の問題は、次のようにも言い換えることができます――③「私たちは〈テクノロジーの文字〉を読むことができない」。たしかに、私たちには、写真のシャッターが切られた瞬間も、映画の一秒二四コマの一コマ一コマもテレビの毎秒三〇フレームも、レコードのビニール上の溝に刻まれた音波の波形も、読むことができない。そして、だからこそ、思い出が現在時のように蘇ったり、動きがありありと見えたり、日本ビクターの犬（もとはグラモフォン[注4]のトレードマークの犬ニッパー君）のように親しい人の声がそこにいるように聞こえたりするという意識の生活を送るようになっています。

人間は機械の文字を読み書きすることができないが、その認知のギャップこそが人間の知覚を総合し、人間の意識をつくりだす。私たちはこの「技術的無意識の時代」において見えないものを見て、意識の成立以前に聞こえるものを聞いて生活している。

日々の生活の中で最新のテクノロジーによるメディアを駆使していながら、「亡霊」のようなものに取り囲まれて生活している。そうしたパラドクシカルな文明を生きている。

我々は生活の中で不可思議なことをいろいろとやっています。テレビに映っている人は、単なる像に過ぎません。iPod[注5]で聴いている音楽は、とうの昔に亡くなったミュージシャンの生きている音源だったりします。つまり我々は音・イメージやことばなど「 Ⅳ 」だけを取り出し、あたかもその人が生きていて近くにいるかのように見なして生活しています。

「スペクトル(spectre)」には波長分布という意味のほかに、「亡霊」という意味もあります。それは、「スペクタクル(spectacle 見世物)」という言葉とも結びつく。我々は音・イメージが作り出す見世物(亡霊)を存在と見なし、日々暮らしています。これこそヴ[注6]ァルター・ベンヤミンが言うところの、「複製技術の時代」に他なりません。いまここに存在しない人が話し、存在しない事物の像や光景が見え、いまここに存在しない人とコミュニケーションして生活している。亡霊がいたるところ徘徊して私たちを日常的に取り巻いている、かなり不思議な「スペクタクルの社会」に私たちは生きているというわけなのです。

テレビジョンの発明にかんしては要素技術の発明が複数で、ラジオやレコードのように発明された年を明確にすることができません。一九二五年にスコットランドの発明家・ジョン・ロジー・ベアードが画像の送受信を成功させ、一九二六年に高柳健次郎がブラウン管による電送・受像を成功させました。この時、高柳は「イ」という文字を映し出した。テレビは、この頃発明されたと言っていいでしょう。NHK放送博物館には、高柳のテレビ伝送実験装置を再現したものが展示されています。

A の『春と修羅』序は一九二四年に書かれましたが、私は、密かに、まさにこれは「テレビの原理」で書かれた詩だと見ています。ちょっと読んでみましょう。

わたくしといふ現象は
仮定された有機交流電燈の
ひとつの青い照明です

（あらゆる透明な幽霊の複合体）
風景やみんなといつしよに
せはしくせはしく明滅しながら
いかにもたしかにともりつづける
因果交流電燈の
ひとつの青い照明です
（ひかりはたもち　その電燈は失はれ）

テレビでは、〔注7〕走査線上を明滅する光のフレームによって、「［　B　］」（意識）が生まれる。「せはしくせはしく明滅しながら／いかにもたしかにともりつづける」テレビの映像のような「［　B　］」が、人々の精神生活をつくっていく。［　A　］のこの詩は、そういうメディアの時代を予言しているかのようです。

亡霊的生活を送る現代の人間の基底にあるのは技術的無意識で、これこそがコミュニケーション文明を形作っている。今は何でもすぐに伝わるし、音でもイメージでも無際限に消費することができる。そういう意味では非常に便利で豊かな時代なんですが、我々はどこか薄気味悪いものを感じている。これはメディアは意識を大量生産するようになったのですが、もはや人間自身はそれを読み取ることができなくなっているからです。

（石田英敬『大人のためのメディア論講義』より）

＊文中に一部省略した箇所がある。

注　〔1〕　セグメント……区分、または単位。
〔2〕　フォノグラフ……音声を記録し、再生する機械。

〔3〕 フッサール……ドイツの哲学者エドムント・フッサール（一八五九～一九三八）。
〔4〕 グラモフォン……ここでは米国、英国のレコードプレイヤー（蓄音機）の商標。
〔5〕 iPod……米国の携帯用メディア再生プレイヤーの商標。
〔6〕 ヴァルター・ベンヤミン……ドイツの批評家、思想家（一八九二～一九四〇）。
〔7〕 走査線……画像を分解して一連の電気信号に変換したもの。

問1 傍線部a、bのカタカナの部分を漢字に直せ。

問2 傍線部①では、どうして「ちょっと変なこと」と言えるのか。その理由としてもっとも適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1 感覚や感情を再現できないはずのメディアによって、それらを意識に生成しているから。
2 認識できない瞬間は記憶もできないはずなのに、それを想起しているから。
3 人間の能力の限界を超えた機械が捉えた瞬間なのに、それを認知しているから。
4 実際にはメディアが作り出した思い出を記憶にすり替えているから。
5 体験していないはずの瞬間の記憶を、メディアを介して他人と共有しているから。

問3　傍線部②はどういうことか。その説明としてもっとも適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　映像というメディアによって過去の再生を見ることで人間に運動を読み取る能力が開発されたということ。

2　高速度で連続させると人間には静止画は見えなくなるが、動画なら時間の作用によって見ることができるということ。

3　現在という時間意識は、メディアが再生する映像の中に書き込まれた運動によって確かなものになるということ。

4　映像は本当は静止しているのに、知覚できない速度でめまぐるしく入れかわることで人間には連続しているものと認知されてしまうということ。

5　映像においては、私が見ているのではなくカメラという機械が見ていると認識することで、はじめて過去も現在と同じく連続した時間であると知覚できるということ。

問4　空欄Ⅰを補うのにもっとも適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　音波などの物理現象

2　聴取のような経験を時間に変換する意識

3　意識できない不在の存在

4　無意識のうちにつくり出される記憶

5　メディアにおいて実現する技術

問5　空欄Ⅱを補うのにもっとも適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　パラドクシカル　2　意識　3　メディア　4　意識生産　5　技術的無意識　6　コミュニケーション文明　7　意識の生活

問6　空欄Ⅲを補うのにもっとも適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　快適　2　完全　3　認知　4　安定　5　自明　6　信憑

問7　傍線部③はどういうことか。その説明としてもっとも適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　現代のメディア生活においては、私たちが見たり聴いたりする意識をつくり出しているものの機能を、私たち自身が意識することはできないということ。

2　現代のメディア生活においては、私たちの認知能力に大きなギャップが生まれてしまい、そのギャップ自体を私たちは認識できないということ。

3　現代のメディア生活においては、意識の成立以前に認知される人間の知覚を機械が総合するが、私たちはそのしくみを理解することができないということ。

4　現代のメディア生活においては、人間の知覚はテクノロジーでしか書けない文字でコミュニケーションすることで成立しているため、私たちの知覚や意識も変容したということ。

問8　空欄Ⅳを補うのにもっとも適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　存在　2　意識　3　瞬間　4　幻覚　5　記号

問9　空欄Aを補うのにもっとも適切な人名を漢字で書け。なお、空欄Aは二箇所あるが同じ人名がはいる。

問10　空欄Bを補うのにもっとも適切な語句を詩の中から抜き出せ。なお、空欄Bも二箇所あるが同じ語句がはいる。

問11　波線部Xに関して、メディアによって「人間の意識生活の成立条件」がどうなったと本文では述べているか、文中の語を用いて五〇字以内で説明せよ。ただし「文字」という語を使ってはならない。（句読点は一字と数える。）

（二）

次のⅠは向井去来が書いた俳論『去来抄』の一節で、Ⅱはその補足説明である。ⅠとⅡを読んで、後の問に答えよ。

Ⅰ　葬にはうき打ち敷くをとこ哉〔注1〕　風毛

魯町曰く「この句、ある人の長点なり。いかが侍るや」。去来曰く「①発句といはば、いはれんのみ」。牡年曰く「先師の「葬に我は飯喰ふをとこ哉」と、いかなるところにしうせつ侍るや」。

来曰く「先師の句は「角が蓼蚤の句に和す〔注2〕」といへるにて、あくまで巧みたる句の答へなり。句上に事なし。こたゆるところに趣あり。［　A　］が句は、前後表裏、一つの見るべきものなし。かくのごとき句は、口を開けば出づるものなり。こころみに作りて見せん。題を出されよ」。

町、すなはち「露」といふ。「露落ちて襟こそばゆき木陰哉」。「菊」といふ。「菊咲いて屋根のかざりや山ばたけ」と、十題十句、言下にふし、「もし孕み句の疑ひもあらん。一題を乞うて十句せん」。町、「砧」といふ。「娘より②嫁の音よわき砧哉」「乗懸〔注4〕のねむりをさます砧哉」といふをはじめ、十句筆をおかせず。

「予は蕉門遅吟第一の名あるすら、かくのごとし。いはんや集にも出でたる先師の句なれば、各別のところありと思ひ知らるべし」。

Ⅱ　去来曰く「③この言は自ら衒ふに似たり。然れども、当時世間の作者、④この葬の句、あるいは「道なかのむくげは馬にくはれけり」などいふ句体の、まま侍るに迷ひて、あさましき句を吐き出だし、芭蕉流とおぼえたるやからあり。⑤その輩にとらせんために、此を記し出だし侍るなり」。

※一部、漢文を読み下し文にした。

注〔1〕俳諧において句頭から斜線二筋引くのが長点で、佳句ということ。
〔2〕其角の「草の戸に我は蓼くふ蛍哉」という句。
〔3〕あらかじめ腹案として作っておいた句。
〔4〕旅人が駄賃馬の上で居眠りをする様子。

問1　傍線aの部分を、「優劣」を意味する漢字二字で書け。また傍線bの部分を「詩を作る」という意の、貝偏の漢字一字で書け。

問2　傍線①の解釈としてもっとも適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。
1　発句と認められればそれだけですばらしい作だ
2　発句と言い続けるならば見当違いだ
3　発句と言えば言える程度の平凡な作だ
4　発句ならばあまりに難解な作だ

問3　空欄Aに入れる語として適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。
1　風毛　2　魯町　3　去来　4　牡年　5　其角

問4　傍線②はどのような心理を詠んでいるか。もっとも適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　声が小さく他人任せな嫁の心理
2　遠慮がちで控えめな嫁の心理
3　病弱で目立たないようにふるまう嫁の心理
4　家の中で存在を主張しようとする嫁の心理

問5　傍線③はIについて何を言おうとしているのか。もっとも適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　ここに示した先師の言は自分の作を評価しているように読み取れるかもしれないが、そうではないということ。
2　ここに記したことは自分で自分の才をひけらかしているように思われるかもしれないが、そうではないということ。
3　ここに書いた論争は他人の作をこき下ろしているように見えるかもしれないが、それは本意ではないということ。
4　ここに述べたことは先師の俳論に追従しているように聞こえるかもしれないが、それは本意ではないということ。

問6　傍線④はどのような内容を指しているのか。その内容を簡潔に説明した部分をIから十字以内で抜き出せ。（句読点は一字と数える。以下同じ）

問7　傍線⑤の「とらせんため」は「悟らせるため」の意である。去来が悟らせようとした内容を示す部分をIから二十字以上二十五字以内で抜き出すとすれば、それはどこか。最初と最後の三字を書け。

問8　次の作品名の中から(1)「先師」の作品、(2)『去来抄』と同じ蕉風俳論の作品をそれぞれ一つ選び、その番号をマークせよ。

1　折りたく柴の記　2　三冊子　3　玉勝間　4　おらが春　5　菟玖波集　6　我春集　7　浮世草子

8　醒睡笑　9　新花摘　10　野ざらし紀行